

西日本腐蝕防蝕研究会の歩みと思い出

公益財団法人北九州産業学術推進機構 松永守央

1. はじめに

西日本腐蝕防蝕研究会（西防研）と私の関りは、九州工業大学に着任した1978年10月に始まる。京都大学大学院在籍時に学会事務を補助した経験はあったが、米国での博士研究員気分が抜けない生意気な若輩が、面識の乏しかった九州山口地域の重鎮の先生方に随分と失礼な態度で接したことを今になって恥じ入る次第です。着任時に第9代会長の日戸元氏（新日鐵）から事務局の担当を依頼されたが、常務理事として事務局を担当された細川邦典教授がETHの在外研究員として不在であり、細川研究室の助手の津留豊先生のご助言が無ければ、何をすれば良いか全く分からない状況であった。それから足掛け13年間、第16代の樋口征順会長の時まで事務局を担当することになる。1992年に文部科学省在外研究員の機会を契機に、山口大学教授の松田好晴会長（第17代）のご提案で、事務局が持ち回りになり、現在の運営に近い形態に移行した。

本稿では、創設時から事務局を担当するまで（1961～1978年）を後述のデータベースと伝聞に基づき、事務局担当時期（1979～1992年）と1993年以降に私が西防研に関与した時期を、微かな記憶を辿り振り返りたい。なお本稿では、当時の職種や団体の名称、所属等を原則として記載し、また曖昧な記憶で事実と異なる可能性もあることをご容赦頂きたい。さらに、西防研としても、私個人としても記録として写真映像を残す習慣がなかったことから、当時を思い起こす資料が少ないことをお許しいただきたい。

2. 西日本腐蝕防蝕研究会の発足

1961年の発足時に小学生であった私には西防研の由来や趣旨を知る由もない。事務局を担当していた時期に、細川教授の書棚に山積みになっていた多量の例会会報を整理し、発見できなかった欠版はあるものの、例会会報をできる限り保存することを試みた。後述のように、「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律」など三法案が2006年に成立し、西防研にも対策が迫られ、おりしも創立50周年と重なるため、新日鐵戸畑技研部長の竹下哲郎会長（第25代）のご尽力で、2007年に例会会報をDVD化した。発足の経緯は、このデータベースに添付された九州工業大学細川邦典名誉教授の寄稿（原文を記載）により知ることができる。

西日本腐蝕防蝕研究会は1961年（昭和36年）、当時の九州大学・伊藤尚教授、九州工業大学・乾忠孝教授、新日本製鐵（株）・米崎茂部長が中心になって企画され、関連企業、国公立研究所、大学の研究者の協力を得て創立された。関東、関西を中心にいろいろな学協会が設立される気運にあったが、金属表面処理や腐食防食に係る企業や研究者の少ない地方にあって類似の学協会が乱立するのは好ましくない、「競合より協力」だということで本研究会が設立された。金属表面技術協会（現表面技術協会）等関係する学協会はすでに中国・四国支部を持っており、広島県までその支部の範囲に入ることから、西防研会員の範囲は山口県以西、九州、沖縄とし、西防研を関係する学協会の支部の受け皿にすることにした。また、当時の学協会が基礎研究に重点を置きすぎ、企業の実務にはあまり役に立たないという批判にも応える活動内容とすることにした。

（九州工業大学名誉教授 細川邦典）

大部分が手書きの例会会報を見たという記憶もあったが、第1回～第4回の例会会報は残念ながら発見できなかった。しかし、発足当時の状況は和文タイプ原稿の第5回例会会報に記載された行事記録から窺える。発足に際して、準備会が1961年1月20日に九工大で開催された。出席者は、九大の柳ヶ瀬勉教授、九工大の乾忠孝教授、平尾一郎教授、相良学教授、福岡県金属工業試験場（現機械電子研究所）の右田泰治氏、三菱化成、安川電機、九州築炉（現九築工業）、三原

めっき（現ミハラ金属工業）、滲透工業、大和鋼管、石川金属、硬化クローム、三島光産である。企業からの出席者名が記載されていないことから、官尊民卑という表現は言い過ぎだが、高度成長以前のわが国の風潮が偲ばれる。準備会では初代会長への伊藤教授の就任や、2月下旬に第1回例会を開催することが決定された。

創立大会（第1回例会）は2月20日に九工大で開催された。48名が出席した総会では、会則の認定、12名の理事の就任、および事業計画と予算が承認された。その後に開催された5時間にわたる記念講演では、金属化工技術研究所長（わが国の表面処理業界で初めての研究・分析・実験装置をもつコンサルタント業務を実施した株式会社）の創業者である藤野武彦博士（元三菱重工業技師）による「海外における金属表面処理の現況について」と、大阪大学多賀谷正義教授による「最近の金属表面処理の動向」という2件の特別講演があり、7件の研究発表（企業2件、金工試2件、大学3件）がなされた。この構成に設立趣旨が反映されている。

その後の3回の理事会を経て、5月19日に第2回例会が金属表面技術協会支部設立総会として開催された。第1回と同様、金材研の橋本宇一所長と大阪大学足立彰教授による2件の特別講演、および6件の研究発表が行われ、西日本工業倶楽部で懇親会が開催された。1961年はさらに座談会と第3回例会（ブリヂストンサイクル旭工場）、第4回例会（三菱記念会館）が開催されている。なお、第4回例会は金表九州支部との共催であり、三菱長崎造船所の工業見学も実施され、現在の開催形態に近づいていることが窺える。なお、1962年2月当時の会員数は、団体会員46社、個人会員14名であり、現在の西防研の維持会員21社と比べて団体会員の層の厚さが目立つ。発足時に発起人の皆様方が努力された成果であるが、その後のオイルショック等の景気低迷期に団体会員の退会が続いたことを経験した者にとっては、高度成長期の活力が羨ましく思える。

1962年には座談会と2回の例会が実施されたが、第6回例会は現在12月に開催されている研究発表会が初めて開催された。例会開催の頻度が落ちているように見えるが、1962年には防蝕講演会が福岡県と共催で実施され、8月に防蝕技術講習会が77名の参加者のもとで第7回例会として実施された。さらに、10月に腐蝕防蝕討論会が金表九州支部を含む8学会と共催で開催されており、アクティビティはむしろ活性化していた印象が強く、高度成長期の日本の高揚感が窺える。1963年には4回の例会（2回は研究発表会）と防食技術講習会が開催されている。この年の特記事項は報文5、資料1、技術ノート2、紀行1で構成される46ページの会誌「西日本腐蝕防蝕」が研究・技術論文として創刊されたことである。名実ともに学会としての体を目指した先駆者の熱意が感じられる。活版印刷され学術誌の体裁が整っていた会誌「西日本腐蝕防蝕」は第8号まで続くが、私が西防研に関わる頃には休刊されていた。会報のDVD化の際に、この「西日本腐蝕防蝕」を記録することを失念したことは大きなミスとして後悔している。もし現在の事務局あるいはどこかの研究室に残っておれば、PDFなどの形で後世に伝えて欲しい。後年、アメリカ化学会からChemical Abstractに抄録される雑誌として、「西日本腐蝕防蝕」を希望するかとの問い合わせがあったが、既に休刊されていたことからお断りした記憶もある。ある時期まで存続していた編集委員会はこの会誌編集が目的であり、先駆者の方々にとっては、学術研究誌としての「西日本腐蝕防蝕」の再発行を望んでおられたと推測する。

1964年には3回の例会などに加えて、金属表面技術協会第30回講演大会が九工大で開催されているが、西防研第16回例会が併催されていることが興味深い。

創刊当時の会報と現在との違いの一つが文献抄録の存在である。第5回会報に文献抄録(2)と記載されているので、1961年の創設時から始まっていたと推測される。若い方々には想像できないかもしれないが、高度成長期の入り口にいた日本の課題の一つは、世界最先端の技術に追いつくことであり、情報収集は大切な作業であった。インターネットの無い時代、掘り所の一つが学術雑誌であった。その約10年後になるが、筆者が大学院生時代に学科図書室でChemical Abstractから自分の関連分野の文献を調査するという気の遠くなる作業を週一回は行っていたことが思い出される。博士課程の時に、ある学会誌の文献抄録を手伝った経験から、当時の学会の役割の一

つが、先端情報の提供であり、西防研もこのような機能を目指したと推測される。しかし、第7回と第8回の会報が無いため正確ではないが、文献抄録が残っているのは第6回迄で、その後は不定期に文献紹介や文献翻訳として1974年の第53回まで続いている。筆者の経験から考えると、文献抄録は会員の負担が大きく、当初の狙いを継続することが困難であったため、文献紹介等への変更を余儀なくされたと思われる。

もう一つの西防研の重要な活動として、地域の産業界などに貢献する講習会（研修会）が挙げられる。腐食防食技術研修会は1961年の創設時から腐食防食講習会として始まり、変遷はあったものの現在まで継続している。一方、1997年から実施されためっき技術研修会は、齊藤明夫博士（九工研、現在の産総研九州センター）、津留豊先生（九工大）、中野博昭先生（第30代会長）のご尽力で、当初は九大工学部（箱崎キャンパス）を会場として開催され、九産大、機械電子研究所と会場が変わったが、現在に至っている。また、不定期に腐食防食や表面処理などに関わる講習会も開催され、会報とは別途に冊子を作製した記憶もあり、例年会報に欠号がある原因の一つである可能性があるが、資料がないため正しいかどうか、自信がない。

3. 西日本腐蝕防蝕研究会との出会い

研究発表などは全国レベルの学会という意識を持っていたので、九工大着任時は九州域内の学会発表には違和感をもって1978年12月の第72回例会（研究発表会）に臨んだ。津留豊先生が指導されていた「シアン廃液の活性炭処理」とともに、「高電流密度パルス条件下でのパラジウム電析」という題目の研究結果を細川研究室の学生が発表した。西日本腐蝕防蝕研究会という名称から腐食防食の分野の研究会という意識が強く、違和感を持ったまま研究発表を準備した。しかし、当時の研究発表の内訳は、めっき関連5件、腐食3件、その他1件であり、研究会の活動対象に表面技術と腐食が同程度含まれていることを実感した。

事務局を引き受けたものの、九州山口地域の学会の立ち位置に違和感を持っていた私をいち早く見抜かれたのは、当時九州産業大学教授を務められていた乾忠孝先生（第4代会長）であった。乾先生は細川教授の先達であり、京都大学理学部のご出身であることから、私にとっては近寄りやすい存在であった。私が事務局を実質的に担当することになる1979年1月の役員会が九州大学で開催されたが、懇親会後に乾先生をご自宅（九工大近くのアパートに単身赴任で住んでおられた）にお送りする戸畑駅からの道すがら、先生が私の意識を見透かされており、西防研の崇高な理念と地方に位置する大学教員のあるべき姿を綿々とお教え頂き、恥じ入ったことが思い起こされる。地域と研究に関する示唆を頂いたもう一つの思い出は、山口大学教授の松田好晴先生の言葉である。松田教授は大学院生の時から存じ上げた九州では数少ない先生であり、着任直後に採択された科研費エネルギー特別研究で一緒にいた。私が地場企業からの依頼を受けるかを悩んでいた時、「地方大学の電気化学の研究者は、専門外でも受け入れる度量を求められる」との趣旨を、先生独特の関西弁で教えて頂き、九工大で地域の企業の方々と共同研究を始める契機となった。学協会の存在意義の一つが、松田先生の言葉にあると今でも考えている。

私が事務局を担当した期間では、12月の研究発表会後の懇親会は新日鐵戸畑会館（九工大西門横、現在の福銀アパートに所在）、1月の役員会の懇親会は箱崎のあと山（箱崎商店街）で開催されることが通例であった。事務局の会計を担当する立場から、新日鐵から補助を受けていたと推測される安価な戸畑会館での懇親会には感謝していたが、なぜ実質的には一カ月の間に二回も懇親会をするのか、疑問を抱いていた。九州大学林安徳教授（第19代会長）のご提案で、研究発表会後の懇親会が学生も参加できる形に改革され、生協での開催ではあるが、会員と学生の交流や若手育成の効果的な仕組みとして、現在まで続いていることは貴重な財産であると思う。

事務局を担当した当時、西防研への最大の懸念は財政問題であった。創設間もない1965年度には、収入約79万円、支出約78万円で運営されており、繰越金も約45万円あった。しかし、私が事務局を担当する直前の1978年度は、収入約56万円、支出約52万円であり、繰越金も約

10 万円に減少していた。金属表面技術協会の支部費は 6 万円から約 20 万円に増加していたにもかかわらず、収入が減少した原因の一つは、オイルショックによる不景気の継続に伴い、多くの団体会員が退会され、西防研の会費収入が大きく減少したことである。その中で新日本製鐵と滲透工業の両社からは長年 10 口の会費を頂戴しており、複数口の諸社を含めて多大な貢献を頂いていたと感謝していた。また、1965 年度には福岡県などの自治体や団体からの寄付金が計上されており、大きく変化した社会的情勢の中で、ある意味では存続を危ぶまれる状況にあった。その結果、当初は繰越金を積み上げる方策として、支出の切り詰めに図った。安価な印刷会社への変更、交通費削減など、色々な知恵を拝借しながら運営したことが思い出される。その中で、金属表面技術協会の講演大会開催は、実行委員会と西防研の役員会を同時開催することで、西防研の支出減につながり、有難かった。さらに、1988 年度から支部活性化のため、金表支部費が倍増され、それ以降は財政に困ることは少なくなった。

また、事務局の役割として、年 2 回の講演会・見学会を開催する会場の選定にも、それなりに苦労した。新しい団体会員が入会された折には、できる限り会場の提供をお願いしたが、過去の開催会場のリストを作成して、周期的に開催をお願いするなど、工夫した記憶もある。

4. 表面技術協会・腐食防食学会との関わり

西防研の設立趣旨は前述のように、金属表面処理や腐食防食分野の研究者が少ない九州山口地区において学協会の乱立を避けるためである。初期の会報から全国から両分野の研究者を特別講演で招聘していたことから、当初から金属表面技術協会や腐食防食協会との間に協力関係が築かれていたと判断される。しかし、会報の主催団体の表記（表紙の下段）を調査すると、第 5 回例会会報には西日本腐蝕防蝕研究会のみが記されているが、第 6 回例会会報からは金属表面技術協会九州支部が併記されている。前述のように、第 4 回例会は金表九州支部と併催という活動報告があるため、第 5 回例会会報の表記漏れの可能性が高い。

一方、1974 年に創立された腐食防食協会（現腐食防食学会）の九州支部の会誌表紙への併記が始まるのは、第 112 回例会（1992 年 6 月）とずいぶん遅い。九州大学教授の林安德先生のご尽力で、支部費が恒常的に配分され、この年から腐食防食協会九州支部の会計報告が独立した形で報告する形式に変わったことと関係がある。1980 年代後半から、公認会計士による学協会の財務処理への関与が所轄官庁から求められ、学協会本部からの要請により、様々な活動に対する記載名称、会計報告の体裁の厳格化や領収書の提出が必要になったと記憶している。このような経緯により、西防研の予算決算の取り扱いが、表面技術協会九州支部（1988 年度～）と腐食防食協会九州支部（1992 年度～）を別記する形式に改定された。なお、後述のように西防研の会費不徴収に伴い、会計処理が現在の両支部のみに移行することになる。

両協会とのもう一つの関りは、表面技術協会の講演大会と腐食防食討論会の開催が定期的に九州支部に回ってきたことが挙げられる。表面技術協会（前身の金属表面技術協会を含む）講演大会は、私の手元にある記録だけでも、1964 年（九工大）、1969 年（天神ビル）、1972 年（場所不明）、1976 年（大博多ビル）、1981 年（毎日会館）、1985 年（九大）、1989 年（山口大）、1995 年（九工大）、2001 年（福工大）、2007 年（長崎大）、2013 年（福工大）、2019 年（福工大）に九州支部が担当している。一方、腐食防食討論会（材料と環境討論会の前身）は手元に資料が少ないので正確ではないが、1962 年（九大）、1968 年（九工大）、1981 年（電気ビル）、1991 年（九工大）、1999 年（九産大）を経て、本年に久留米シティプラザで開催予定の第 69 回討論会に至る。この間、山口市や長崎大学で開催された記憶もあるが、関連資料を発見することが叶わなかった。ご記憶のある会員の皆様に、正確な年度や開催場所などを追記して頂きたい。また、腐食防食学会では古くから沖縄支部が設置されていたことから、討論会が沖縄で開催されたことも多いが、九州支部担当ではないので、ここでは省略した。

5. 任意団体としての西日本腐蝕防蝕研究会の立ち位置の明確化

「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律」など 3 法案が 2006 年に成立し、社団法人や財団法人の新しい制度が 2008 年から施行された。本来の趣旨は乱立していた法人格を有する団体に対して、「民間が担う公益」をわが国の社会・経済システムの中で積極的に位置づけて、その活動を促進することや、公益法人について公益性の活動の実態や不透明な経理などの諸問題に適切に対処する観点から、制度を抜本的に見直すことにあった。学問や産業に関わる学協会にとっては、公益性に問題があるとは言えないが、この法制度の導入に対して、法案成立時の頃は多くの学協会が対策に四苦八苦することになった。

西防研はこのような法人格を申請していない任意団体であったことから、その財産の処分や会の存続について対処することが不可欠であった。当時の竹下哲郎会長（第 25 代会長）は、主に税務対策の不備から任意団体の危うさを解決する必要があると考えられ、抜本的な解決策を講じる必要を訴えられた。表面技術協会と腐食防食協会の繰越金は協会本部の指導により僅かであったが、様々な形で余剰金を蓄積してきた西防研は多額の資金を有していた。2007 年当初には創立 50 周年記念事業基金 80 万円、国際学術交流基金 70 万円、前年度繰越金約 124 万円を保有していた。これらの原資は西防研会員から集めた会費が大部分であることから、創立 50 周年記念事業の一つとして、過去の例会会報を DVD に保存し、名誉会員を含む団体・個人会員全員に配布することにした。記録が手元に無いので不正確であるが、西防研が保有していた財源の多くを充てたと考えている。これらの記念事業を契機に、西防研は財源を持たない任意団体として継続し、活動は二つの支部予算を使用することになり、現在に至っている。

6. 西防研を支えられた先生への御礼と若くして亡くなられた先生方への悔恨

西防研を維持する上で個人的に最も大切な存在は、九州大学名誉教授の福島久哲先生（第 21 代会長）である。第 10 代会長の東敬教授の講座で助教授を務められていた時代から、様々な局面で西防研の中心的な存在としてご貢献頂いた。個人的には、Interfinish2000 (@ Garmisch-Partenkirchen) に参加の折に、九州産業大学の小林繁夫先生とともに、Neuschwanstein 城にバスを乗り継いでお連れ頂くなど、楽しい思い出が多い。余談ではあるが、コロナ禍直前に当地を訪れる機会があり、当時を懐かしく思いだした。また、長崎大学名誉教授の内山休男先生（第 26 代会長）には、私が学内業務に専念し、学会活動から離れざるを得なくなった後に、西防研の中心的な役割を果たして頂き、感謝している。

九州山口地域での学協会活動では、数多くの皆様方の知己を得た。会長などの役職を務めらえた企業関係者の皆様の中には、同窓会などを通して再会の機会があった第 20 代会長の澤田献氏や第 23 代会長の原谷勤氏などもおられるが、多くの方々とは疎遠になってしまった。

一方、学会活動途中で残念な形でお別れした先生方もおられる。特に、本来なら西防研の中心的な存在として、活動を支えてはずであった九州産業大学教授の秋山徹也先生、九州大学助教授の増田正孝先生が、道半ばで逝去されたことは本当に残念でならない。

7. おわりに

乏しい記憶をたどりながら拙文に筆をとっている際に思い起こしたのは、国際学術交流基金のことである。西防研関係者では、九工大名誉教授の大西正巳先生（第 15 代会長）をはじめ、福島久哲先生、林安德先生、九工大下崎敏唯先生など、韓国の大学に所属した経験のある方が多い。西防研もいずれ外国の学会と共同での研究発表の機会を設けたいとの願望もあった。グローバル時代には、もう少し進展した形があると考えるが、西防研が単独予算を廃止し、そのような機会を失ったことは、後進の皆様に対して申し訳ない気持ちで一杯である。

西日本腐蝕防蝕研究会が本来の趣旨を忘れることなく、これからも地域の産学官から信頼される存在であり続けることを期待して、若手の皆様方のご活躍を祈念いたします。